

『時を愉しみ』読書する私

林 耕司^{a)}

a 長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

ことばの相談室が本格的に開設されて丸5年が経つ。相談に来る子どもたちの大半は自閉スペクトラム症と診断のついた子どもたちだ。年長になったS君は新幹線にとっても興味を示していたので、新幹線の名前を使って仮名文字を教えた。そうすると、いつの間にか仮名1文字の音読ができるようになり、新幹線名で使われる仮名文字をばらばらにして提示しても瞬く間に「かがやき」「とき」「はくたか」などと新幹線名を文字構成できるようになっていった。そんなS君のお家での様子をお母さんにうかがうと、パソコンで「しんかんせん」と検索をかけ、様々な新幹線の画像を楽しんでいたり、興味津々の「にんじん」の深堀検索をパソコンでやっているとのことだった。それを聞いて現代の子どもたちは明らかに昔とは違った時代背景を背負って成長していくのだと思った。このようにICTに注目が集まり、生成AIが話題を独占する中、障害を持った子どもたちの芸術的才能のすばらしさが少しずつ世間に認知される時代になりつつある。知的障害のあった放浪の画家として山下清が有名だが、今は日本各地でそのような特異な芸術的才能を持った発達障害児者が発掘されるようになってきている。

これを書いているのは2024年（令和6年）の1月中旬である。年明けの元日早々から能登半島地震が起り、日航の飛行機事故が羽田空港で発生し、新年を祝う気持ちより胸痛める気持ちの方がまさった新年を迎えることになってしまった。地

球の沸騰化によるすさまじい気候変動、何時までも続く戦争での殺戮（ウクライナ対ロシア、イスラエル対パレスチナ）、生成AIがもたらす社会への脅威など未来は極めて混沌としているようにみえる。

そんな不安が渦巻く世界を自分はどんなふう生きてきたのか振り返ってみようというのが今回のエッセイである。吉野弘の詩に「過ごすことは過（あやま）つこと」という一文が出てくる。このことばは僕の日常の心構えに影響を及ぼすことになった。一日を振り返ってうまくいかなかったことが多くても「ふだんの時を過ごす中には過ちがあつて当然さ」と自分を慰め励ますことができるようになった。国木田独歩が言ったという「君いびっくりさせなきゃいけませんよ」ということばを私自身の座右の銘として生きてきたことと相まって強く愉しく生きようと思うのである。このように僕はいつも生きる上での「ことばの力」の大切さを感じているのであるが、一方ではことばができあがっていく仕組みにもとても不思議を感じている。私は小学生の頃は大変に不勉強な子どもだったらしく、「あやまる」ということばを「誤る」としか漢字に変換できなかった。それがいつのころからか人に迷惑をかけて「あやまる」場合に「謝る」という漢字を使うのだということを知って大変に驚いた。「謝る」という行為の背景には謝れることに「感謝する」という気持ちが背景に働いているから、「謝る」という漢字ができてきたのでは

a 長野医療衛生専門学校
〒386-0012 長野県上田市中央2-13-27
info@nagano-iryousei.ac.jp

ないかと思ひ、ことばが出来上がっていくときに働く人間の知恵のすばらしさに感銘を受けている。

さて、ここからはコロナがインフルエンザと同じ5類に引き下げられ人々の動きも活発になり始めた昨年2023年(令和5年)の5月からの私を振り返って綴っていききたいと思う。5月の末に大学時代(1971年~1975年)に属していたライチウス会というボランティアクラブの同期の集まりが10数年ぶりにあった。僕を入れて6名が新宿の鍋料理専門店に集まった。少し早めに行ってみると顔に見覚えのある老人が二人席に座って僕を出迎えてくれた。“アレッ、老人がいる”と感じるほど時が経っていることに今更ながら驚かされ自分の老いもつきつけられた。卒業以来40数年ぶりに会うという友も一人いた。青春時代の友というものはほんとに不思議なものだ。あつという間にうちとけ話の中に楽しくもぐりこんでいった。僕は20数年前に開かれた高校時代の同期会に行きそびれ、その後担任のK先生が亡くなられ同期会は開かれなくなったし、小学校・中学校のクラス会のお誘いは一切来なかったもので、このように若き頃の友だちに再会するという機会は二度目のことだった。なんと気軽に楽しくこころ弾んで会話できるものかと目を見張る思いがした。各地で行われている同窓会というものは老いへのまたとない贈り物なのだろう。

それ以来、集まった同期生とのlineメールの交換が始まった。ここではline75と名づけられたline交換メールに主として僕が綴ったメール内容を基にして昨年5月からの『時を愉しみ』読書する私を綴っていききたい。

5月28日

昨日は上野でマティス展を観て、同期会に参加した。皆と会って気持ちが若やぎ、皆さんは皆さんなりに頑張ってきたんだと思ひ、今後の僕を力づけるものとなった。31日から予定していた夫婦での長崎旅行を台風の影響でキャンセルし

た直後の東京であった。

6月6日

ボランティアクラブのライチウス会に入っていた頃は子どもにはほとんど興味がなく、児童施設の子どもたちに勉強を教えに行くボランティアにはほとんど参加しなかった。それが、言語聴覚士になって4年目からは発達障害を持つ子どもたちの言語支援を嬉々として行っている。人というものは時を経て経験を積み重ねていくうちにどんどん変わっていくものだとつくづく思う。

6月8日

2年前から朗読の会「和」に入会して朗読を愉しんでいる。今日の会では向田邦子のエッセイ「眠る盃」を皆で読みあつた後、家から2~3分の土手沿いに作られたジョギングコースを歩いた。このコースは1.6キロあり、アカシアの杜に囲まれていて、春から夏にかけては特にアカシアの木々が青々として美しく、東側に菅平、西側に北アルプス鹿島槍、北側に飯縄山が見渡せる。とてもこころなごむ散歩コースでもある。僕が山登りを始めたきっかけは、初めて勤めた山梨県石和温泉の地のリハビリテーション病院で同僚のM君が南アルプス塩見岳に連れて行ってくれたことに始まる。この経験をきっかけに自然の中に入り込んで呼吸するすばらしさに少しずつのめりこんでいった。ことにリハビリの連中と登った富士登山では寒さに震えながら見た早朝のご来光が美しくいつまでも思い出に残るものとなっている。半年ぶりに行った歯科検診では虫歯が見つかり治療に通うことになった。

6月10日

小川洋子の「人質の朗読会」を読んだ。人質たちが皆で自分の人生を語る場面があるのだが、そこで言われた「自分の過去を掌に乗せ、そっと温めてから言葉の舟に乗せて聞き手に届けてごらん」ということばが印象に残った。同期でのline75メールが始まったので自分の過去をゆっくりと振り

返ってみたいと思う。朗読の会でもらった川柳も読んでみた。“一晩にトイレで妻と三度会う”“永眠があるから不眠気にしない”“赤い糸いつの間にやら命綱”どれも分かる分かるとうなずきほほえむばかりであるが、妻という時間が格段に増えてきて妻がこころの杖になってきているのをひしひしと感じる。核家族だけにどちらかが倒ればどうなっちゃうんだらうという不安もこころの隅にちゃんと居座っているようだ。

6月11日

月曜と火曜は当専門学校に出勤している。ことばの相談室で発達障害児への言語訓練（一日2ケースほど）を行い、3年生に言語発達障害学を教えている。だから、月・火は早朝5時から自分の弁当と朝食を作り始める。野菜を切り、果物をむき、卵焼き、みそ汁を作りといったいたって単純な作業であるがこれが50分もかかる。朝食を食べながら6時からラジオ英会話を聞く。2年前からオーストラリア人の先生について週1回の英会話教室（参加者11人）で英会話を習っているが、話す聞く共になかなかうまくならず難渋している。Lineメールの友人からは民生委員になっていた、SDGsの団体のボランティアをしている、家庭裁判所の調停委員をしていたというメールが入ってきている。また、二人が銀行と町工場での事務仕事に就いているとのことだった。

6月16日

しなの鉄道の引き込み線で脱線事故があり、上田方面行の電車はストップしているので今日は往復共に新幹線利用となった。

5月に大学の友人たちに会い自分は若いころはどうやって生きたのだろうかとか以前よりよく考えるようになった。過去はもう済んだことだから考えてみても思ってみてもしょうがないと考える人もいるだろうが、僕は過去に戻れるなら成人式にも出られず悶々としながら生きて何、生きる意味はあるのだろうか、どんな人生を生きて行けばいいのだろうか、と考えながらも一生懸命独

りで受験勉強をしていた宅浪（二浪）の時代に戻って若き時代の自分を見つめてみたいと思っている。アラスカに消えた写真家の星野道夫が次のように言っているのにはまことに励まされる。「自分の中にしまわれている過去、未来がどうあろうとも決して損なわれない過去の思い出」「結果が最初の思惑通りにならなくとも、そこで過ごした時間は確実に存在する。そして、最後に意味をもつのは、結果ではなく、過ごしてきた、かけがえないその時間である」いよいよ僕も過ごしてきた時間を振り返る冒険旅行に出かける歳になったのだと思う。

6月18日

まだ6月半ばであるにもかかわらず熱中症にご注意をというようなことがテレビで盛んに告げられる陽気になってきた。紫陽花の花がきれいに咲き始めた。Y君から「林さん、自然豊かなところに住んでいると時間がゆっくりと流れているようですね。“春の海ひねもすのたりのたりかな”蕪村。時を振り返る旅羨ましいです。奥方がこの春からN大学に入学しました。彼女は古希になり新たな冒険の旅に出かけています。残日録には思い出の旅か新たな旅かどちらを描くことにしましょうか。林さんの話をゆっくり聞きたいと思いました。」というlineメールがあった。そして夕方、我が家にマニラに住んでいる息子とそこでインターナショナルスクールに通っている小学3年の孫がやってきた。孫は早くも夏休みでそれを利用して明日から長野市内のS小学校に通う予定である。1か月ほどにぎやかでちと大変な日々を過ごすことになりそうだ。コロナ禍では2年ほど息子家族が長野に避難してきて大変ににぎやかな楽しい孫との日々を送れたのはコロナ禍がもたらした幸せでもあった。

6月21日

今日は夏至。いよいよ夏の到来だ。先週は善光寺の裏手にある老舗の鰻屋で鰻を食べてきた。周りのお客たちは上鰻5700円也をどんどん注文し

ていくのでびっくり。僕たちはいつも 2800 円の大串井の鰻。神田の名店に劣らぬうまさだ。Y 君夫妻は二人して麻雀屋にも出かけているようだ。わが奥方様のチャコは着付けの仕事や自身の日本舞踊の習い事に熱中している。自分なりの愉しみを持っていてこちらもとても楽に過ごせている。

6月29日

先週は小学3年生の孫の授業参観に行ってきた。ぎっしりと教室に詰まった31人の生徒を見て、教師の大変さと喜びを想った。皆が元気にハイハイと手を上げるなか、孫は一度も手を上げなかった。なんで手を上げないのときくと「間違えるのがいやだから」と言っていた。帰りに一階の廊下に掲げられた「暦日」と題された抽象画が目にとまった。暦日ということばに初めて出会ったので辞書を引いてみると、一日一日の月日の経過とあった。過去を振り返ることは「暦日」を想うことなんだと知り、過去の一つ一つがより愛おしくなった。

週に1回ほど電動チャリで長野駅周辺に出かけ、本屋をうろうろし、温かい立ち喰い蕎麦を食べ、新幹線出口の正面にある喫茶でコーヒーを飲みながら本の世界に入っていくというのが最近の日課になっている。立ち喰い蕎麦屋は1950年開店で鯉節のうまみのきいた醤油の汁が抜群にうまいので、汁は全部いつも飲み干してしまう。月見蕎麦350円の食券を自動販売機で買い、その食券を出すとたちまちにして熱々の蕎麦が出てくる。ほんとうに旨くて安くて美味しい。旅行者にも人気で外人さんもしばしば見かける。

Y君からlineメールが来た。「いつも林さんの話に都会にはない空気を感じます。人が多すぎるのか空気が濃いのか、ミヒヤエル・エンデの“モモ”の時間を奪う灰色の男たちに狙われているようです。奥方が今朝から長野県の茅野へ縄文のピナスを見に行っています。N大学の卒論のテーマを探しているようです。彼女はまた違った時間

の中で生きています。」Y君ご夫妻はお互いがほどほどで適切な距離を保って生活していらっしゃるやましい。

7月7日

K君は肺癌の治療をしつつ足の痺れと腰痛のリハビリにも通っているようだ。モンテニューは15年に亘って腎臓結石を患っていて、次のように述懐する。「おまえはうめいて汗をかき、あおくなるかと思うと真っ赤になり、がたがた震え、血まで吐き、激しいケーレンに苦しみ、ときに大粒の涙を流し、濃厚でおぞましい小便を出す」私も病院の診察券がどんどん増えている。モンテニューの思想は現代の下手な老人論よりよほど優れている。私には藤原新也が「メメントモリ」に掲載した写真、特に犬に喰われる人間の死体の写真が頭にこびりついているが、モンテニューは死など考えるなど言ってくれるし、おおいにいやらしいことを考えて情念を燃やせと励ましてくれる。16世紀に生きた彼はすばらしい。快楽を否定しないから尚すばらしい。

7月28日

3年間トイレに置いて読んできた「須賀敦子の方へ」の本の表紙が手垢で汚れてきたので「須賀敦子の旅路」に替えた。私の大好きな本は須賀敦子が書いた「コルシア書店の仲間たち」だ。人間同士の交わりの様子が深く鮮やかに描かれており、描かれた一人一人の人間が好きになってしまふ。この本も読後、何年かトイレに置いて繰り返し読んだ。

K君から宮本輝を読んだとのlineメールが来た。宮本輝の手紙形式の小説「錦繡」は彼の代表作の一つだが、この小説に出てくるミモザってどんな木だろうと思いつつ何年も過ごした後、旅先で黄色満開のミモザに出会った。初恋の女に出逢ったかのようにうれしかった。

7月29日

現在の一瞬一瞬が過去になっていくと思うと時

が音をたてて轟々と流れているのを感じる。生物学者・福岡伸一が書いた「動的平衡」は殊の外、私のところにインパクトを与えた。この本では生命は現象として、流れとして捉えられている。日本人は「方丈記」の「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」という考え方にはころからずっと入っていけるので尚更、生命は現象である流れであるという考えがストンと腑に落ちるのだろう。福岡さんの大好きな画家はフェルメール、私はモディリアーニ。大阪の中之島公園にできた新たな美術館にモディリアーニが描いた大胆な裸婦が展示されている。ぜひ観てみたいものだ。

7月30日

Y君の奥方（彼は妻のことを奥方と書いてくる）が古代史をN大学で受講しているとのメールがあった。村上春樹の短編集「一人称単数」を読んでいたら古代が二度出てきた。一つ目は「僕が18歳だったのは遙か昔のことだ。ほとんど古代史みたいなものだ。」もう一つは「すべては古代文字のように解読されないまま残されている。」これらを読みながら、共時性を久しぶりに感じていた。

8月7日

温泉掛け流しの湯量豊富な良き温泉、野沢温泉に行ってきた。ここ野沢温泉と岡本太郎の縁は深いらしく、宿の手ぬぐいには太郎が描いた“湯”の文字が青く鮮やかにあしらわれていた。7年ほど前に訪れた岡本太郎美術館や岡本太郎記念館も見応えがあり、「芸術は爆発だ」と叫ぶ岡本太郎の身振りをまねして写真を撮ってみたこともある。1970年の大阪万博に住んでいた神奈川県から万博会場を訪れ太郎が制作した“太陽の塔”に見入ったものだ。数年前には会場跡地の公園に立ち太陽の塔を見上げた。当時は理解できなかった太陽の塔の偉大さが少しはわかる気がした。

8月9日

朝から27度を超える気温、最近の暑さは尋常

ではない。私は40代からいろんなケガや病気に見舞われてきた。ちょうど40歳の時には愛犬と走っていてころんで打ち所が悪く右大腿骨骨頭を骨折し手術を経て3か月の入院。50代では腹膜炎でS状結腸を10センチ切除したり憩室の出血で内視鏡手術をうけたり、腸閉塞で入院治療を受けたりと近代医学の恩恵なしにはわが命はなかったと思う。体の声を聞き、体をいたわり、元気で過ごしたいものだと思う。K君は肺癌治療をこの12年間受けており、発病以来ライチウス精神でキッパリと禁酒・禁煙しているとのこと。このキッパリということばを聞いて「キッパリ！たった1分で自分を変える方法」という本のことが思い浮かんだ。この本には60項目のきっぱりやめようが提案されているのだが、僕はたった一項目だけ実行している。玄關の靴揃えだ。これができるようになったおかげで精神がさっぱりした。

8月11日

line ライチ 75 で学生時代の友だちとメールで交流していると過去は単に過ぎ去った懐かしいものではなく今を元気づける励ましに満ちたものだと思うようになってきた。私がこのライチウス会というボランティア団体に属していた時には成人の施設へのボランティアというものがなかったので、自分たちを受け入れてくれる施設を開拓していった。僕たち学生ボランティアを受け入れてくれたのが世田谷にあるS施設であった。その時に会った利用者さんたちの中には難聴者がいたり車いすに乗った言語障害者がいたりした。今思えばその出会いが私が出会った初めてのコミュニケーション障害者ということになる。私の言語聴覚士としての原点はこのライチウス会にあったと改めて気づかされる。K君のことばを借りれば“ライチウス精神”がずっと息づいていたと言える。

8月12日

酷暑のなか庭では鈴虫が鳴き始めた。例年今頃になると鳴き始めるのだが、いつもながら秋の知らせが真夏の暑さの中にまぎれこんでやってくる

ことに驚いてしまう。K君が「僕は生涯青春！」と語る時、イタリアの詩人ウンガレッティの詩「難破の愉しさ」が浮かんでくる。その詩は「すぐまた旅に出る 難破に生きのこった 老水夫のように」と語っている。こんな力強い詩たちに私は日々励まされて生きている。

8月14日

長野ではなぜかお盆に天ぷら料理を食べるので我が家でも天ぷらを食べた。お盆休みには日本文学の古典を現代語訳で読みたいと思い「徒然草」を読み始めた。古典文学といわれるものが大胆な現代語訳で読めるなんてなんて素敵な時代に生きているのだろうかと思う。

8月15日

宇多田ヒカルの歌が聞こえてくると時に新宿の高層ビルから飛び降りた母の演歌歌手・藤圭子を想う。沢木耕太郎が綴った「流星ひとつ」にはほんとうに美しい藤圭子の姿が描かれている。

9月1日

今朝は詩人の伊藤ひろみが現代語訳したお経「いつか死ぬ、それまで生きるわたしのお経」をCDで聴く。彼女が言うように般若心経や法華経などのお経を詩としてみる、源氏物語などの古典文学を仏教文学としてみるという発想はたいへんに面白い。

9月7日

時間は直線的・不可逆的に進んでいくように感じられる。死が一段と自分に近づいてきて時間とは何かを考えることが増えてきた。ボルヘスは「われわれの運命は不可逆不変であるゆえに恐ろしい」と書く。さらに「時間はわたしを運び去る川であるが、川はわたしだ」と述べている。最近、私も時間の川が轟々とどろきながら宇宙を流れていくのを感じるようになっていく。

「14歳からの哲学」を書いた日本では珍しい本物の哲学者・池田晶子は死は無なんだから怖れることはないと説く。何もないんだから怖くないは

ずなのに、この生身が無をかえって怖れてしまう。まことに厄介な生き物だ、煩惱具足の人間は。

9月10日

本屋で絵本「パンドロぼう」を立ち読みした。食パンがパンを盗んで面白いという発想に酔いしれて「おもしろえ」と思って第1巻と第5巻を読んで帰ろうとしたら、第3巻をさっと持ってレジに向かった女の人がいたのでついつい全巻読んでしまった。この長野駅前の本屋にはいつも電動チャリを使って行くのだが、もう10年も乗っているのに一度もパンクがないのにはびっくりだし有難い。昨日はこの電動チャリでマイナンバーカード申請に行き、セブンイレブンのnanacoカードを初めて作り政府支給の2万円をそこにゲットした。ナンバーカードを作成してくれた女性の声が美しくうっとり聞きほれた。

9月15日

仕事がない日の私の昼は本を5~6冊抱えてミズドヤモス、ガスト、デニーズに行き、読書に浸っていることが多い。車で5分から10分以内にこのようにいわゆるファーストフード店やファミレスがあるのはほんとうにストレスがなく生きられる。30数万人が住む自然に恵まれた都市長野はほんとうに住みやすいと思う。

9月26日

昨夜、台湾から夜遅く帰国した。3泊4日の旅であったが妻が3日目の朝に体調不良となり近くの病院に妻を担ぎ込むというドタバタもあった。幸い診察を受ける頃には吐き気も収まり事なきを得た。この病院では言語聴覚士が働いているらしく、聴力検査室には“言語中心”という札がかかっていた。“言語中心”とはなかなかの言葉だとしばしうなった。今回は台北をコンパクトに楽しめた旅であったが、衛兵の交代式は青い空、木々の緑、オレンジの屋根、衛兵の白服と相まって実に美しかった。

コロナワクチンを肺癌治療中のK君が7回目接

種した。彼はコロナにかかり肺炎にでもなれば「一発退場」だと書いていた。その一発退場ということばが恐ろしくも哀しくも私の胸を撃った。台湾の地下鉄では半数の人がマスクをつけていた。そして、若い女性がさっと老人(私!!)に席を譲った。まだまだ謙譲の美德が残っているようでうれしくなった。

9月27日

「先生の靴」を書いた川上弘美が読売新聞で詩人フェルナンド・ペソアを紹介していた。自分の中に様々な人格を持った人々を住ませ、その人々の口から詩を創っていったペソア。ペソアの詩を読むと、生きるとは、人間とは実に不思議で多様な生き物だと想わせてくれる。アントニオ・タブッキが書いた「インド夜想曲」も私に何度も読んで楽しめと求めてくる小説だった。ペソアもタブッキもポルトガル人。ポルトガルはいつか行ってみたい地になっている。

D君からlineメールが来た。彼は君付けなしで呼べる友だが彼が次のように書いてきた。「このline75メールを読んでいると青春に戻ったようで!林君がいたところで鏡ばかり見ている光景を思い出して笑ってしまいます。」これを読んで僕も思わず笑ってしまった。

9月28日

週一回、英会話に通いはじめて2年が経つ。ここに参加しているのは60代から70代にかけての男女合わせて11人。このいわゆる高齢者たちの現状は日本の高齢者たちの現状を映し鏡にしている。実に面白い。ある者は腎臓摘出をし、心臓の手術を受け、コロナ感染に倒れ、老人性難聴を発症し、白内障の手術を受け、家で転んで骨折しリハビリに通い、90代の父母の介護をしている。そして、温泉のすのこで足を滑らせクモ膜下出血を起こした人もいる。笑っちゃうほど日本の老人の現況を伝えている。このようにほとんどの人が様々な厄介ごとを抱えてこの英会話教室に元気にやってくる。アダム先生は張り切り先生でユーモアを介し、

時にちょっとした日本語単語も交えて様々な世の中の動きを伝えてくれるのでこの1時間の英会話に参加すると元気を取り戻せる。うれしい。

9月29日

今晚は中秋の名月。長野の空は雲ひとつなく名月が輝いている。紫式部や清少納言が暮らした平安時代の人々の月明りへの想いは今よりも段違いに強かったんだろうと思う。昔の林家には祖父母もおり、お団子のそばにはすすきが飾られていたことが懐かしく思い出される。

10月1日

昨日は甲府で4年ぶりに全国失語症者の集いが開催された。僕は長野失語症友の会の会員やボランティアと共にオンラインで参加した。友の会で演劇をやってきた会員仲間が5人ほど参加していて10年ぶりくらいの再会となった。“僕の言葉はゼロなんです”の名演技で全国に名をとどろかせた佐藤さんが今は絵画の才能を発揮してきて障害者の絵画部門で大賞を取ったようでその絵画が飾られていた。佐藤さんによると脳出血以来、絵を描こうとすると全角度から立体的に自分の描く絵が想像できるようになったとおっしゃっていた。脳の一部の障害は今まで隠れていた他の異質な能力を発揮させるということは知っていたが、佐藤さんもその例に当てはまるようだ。がんばって絵の能力を伸ばしてほしい。

失語症は言語障害のひとつであるが、このような言語障害に関して世間の認知度は低く、従ってそこに従事する言語聴覚士というリハビリ専門職への認知度も低い。日本語の理解さえおぼつかなくなってしまう重度失語症を呈する方の障害の等級が3級とは“ことば”が失われれば社会的生命も危機に立つということが、ことばが生きる上でいかに大切かということがあまりにも理解されておらず悲しい現実が続いている。

10月8日

暑かった日々から一転して気温が下がり、寒い寒いとこぼしながら生活していて、今日はモスに

いる。モスの海老カツバーガーはほんまに美味しい。河合隼男と小川洋子の対談「生きるとは、自分の物語をつくること」を読み、深く考えさせられた。また、本屋で川上弘美の「三度目の恋」が伊勢物語の現代語訳を彼女自身がしたのをきっかけに書かれたと知り、俄然、在原業平が主人公の「伊勢物語」を読みたくなり読了。この物語を読んでいると失恋すると出家するというパターンが実に多い。この世を出る、死を意識するという思考が強くあったんだろうと思う。だからこそ物語になる。「堤中納言物語」もと読んだらこれがまた面白い。虫愛ずる姫の物語などは少し知ってはいたが姉妹を取り違えて寝ちゃう話などとても確かな男性心理が描かれていた。この間会った同期のD君が芸者転がしの話をしていたが彼に勧めたい物語ではある。

川端康成の「掌の小説」を読み始めた。ここには百十一編の小説が並んでいる。十二編読んだが、いずれも幻想的なもの、官能的なもので興味が湧いた。Y君から町会を法人化する作業を続けている旨のメールがあった。畑違いの私には到底できないこととその仕事ぶりに圧倒される思いがした。

10月9日

今日はガストで明日の学校の講義の準備をしている。休日なので子どもたちがワイワイと騒いでうるさいが、不思議とやることに集中できる。精神的な緊張が保てるからだろう。

私が教員になろうとは若い時分には思ってもみなかった。当学校との縁は東京で行われた国リハ式<S—S>法言語発達遅滞検査の講座をこの学校の教務のA先生が受講したことに始まる。私がこの講座でチューターを務めていたのでA先生と顔見知りになったのだ。その後、校長先生（現理事長）からも熱心なお誘いを受け、2期生から言語発達障害学を教えることになった。病院に勤めながらなので土曜に二コマから四コマの講義時間を用意してもらって車で通った。言語発達障害学では

自閉スペクトラム症というような発達障害の問題を扱っていくが、世間によく発達障害ということばが認知されるようになってきている。

10月10日

Line75に象徴される1975年は私たち同期にとって決定的に大事な年になった。学生から社会人へと自分自身の変貌を遂げざるを得なかった年だからだ。僕は25歳で皆は23歳の年。多くが金融関係へと就職する中で僕は言語聴覚士を養成する日本でたった一校の国立聴力言語障害センター聴能言語職員養成所という長たらしい学校名を持つ養成所に合格しそこに一年間通うことになった。たまたま大学の掲示板でこの学校の生徒募集のことを知り受験したら受かったという次第である。この掲示を見つけなかったら私はどんな人生を歩いていたのだろうと思うことしばしばである。卒業間際の一月になっても将来の行き先が決まらず合格した喜びは大学合格以上のものがあつた。ああやっと自分の将来がほの見えてきたという気持ちだった。この学校は早稲田大学文学部の正門前を通り過ぎた所にあつた。わくわくしながらこの養成学校に通つたというよりも言語障害を扱う言語訓練士というものがどんな仕事をするのかもわからないまま、やっこの先の自分が自分の力を発揮できる場が与えられるんだと思って身の引き締まる日々を過ごしていた。

10月14日

信濃美術館で長野市出身の池田万寿夫の展覧会があるので、まずは彼が芥川賞を勝ち得た「エーゲ海に捧ぐ」を読んでみた。あなたの濡れた地中海が手のとどくところにあるなどの女性があつたときに放つ蜜の話ばかりでチト困ってしまった。池田万寿夫の版画展らしいが澁澤龍彦へのオマージュとして天女の舞を彫つたと知り驚いた。なぜかというに僕は今、澁澤龍彦にはまっていて「東西不思議物語」や「幻想の肖像」を読み終えたところだからだ。澁澤を知つてからは幻想や奇想な

ど今まで一顧だにしてこなかったものへの興味が湧きだしてきた。そして、その延長上に奇想ボルヘスもいる。

澁澤龍彦本は僕が病院で担当した ALS を患った 50 代初めの女性 S さんの遺品として娘さんから頂いた本である。彼女が僕のリハビリの手から離れて転院した後もその病床を見舞った。もう声を出すことも起き上がることも不可能になっていたが、なんとか最後まで付き添えればと考えていた。ところが僕に病気が降りかかることになり彼女の病床への訪問は中断され僕の入院期間中に彼女は亡くなってしまった。僕の手元に届いた彼女が読んでいた分厚い単行本たちは澁澤龍彦の「機械仕掛けのエロス」「仏蘭西短篇翻譯集成Ⅱ」などで、翻訳本の「さかしま」などもあり、またフーコーの「狂気の歴史」も入っていてこんな哲学書も読んでいたんだと度肝を抜かれ、こんな本たちにはまだまだ私はたちうちできないなあと本箱に眠らせておいたものだった。彼女が亡くなって 10 数年後の去年に頂いた本の中に表装の美しい「唐草物語」があり、ふと読んでみる気になり読んでその本が大層面白く、そこに描かれる幻想に魅了されるきっかけになった。

10 月 15 日

今朝早く妻のチャコ様は紫の羽織を羽織って着物姿で颯爽と出かけて行った。Y 君から次のような line メールがあった。「昨日は地域の中学で自治会が中心になった防災訓練があった。全校授業として中学生も参加。都会の大災害では自治会内の 5,500 人の住民がトイレの問題に直面する。私はトイレ担当。3,000 人が自治会員ですが、新たな住民の方の多くが自治会に参加しておらず、マンション住民の増大も地元意識の低下につながっており、都会の自治会活動も岐路にある」という内容であった。東北大震災の大災害が起きており備えは万全かと問われてはいるがなかなか備えとなると大変なことである。その中で大学同期の仲間が自治会防災活動などに奮闘しているのは誠に

頼もしい。

10 月 16 日

読売新聞に自分を作った書物たちという欄があるので私も自分を作った本をちょっと考えてみた。小・中学生の頃はほとんど本に興味はなかったが「鉄仮面」だけは夢中になって読んだのを覚えている。高校になって太宰治の「人間失格」に出合って自分というものに面と向かい合うことになり、自分って何自分って誰、生きてるって意味があるなど様々な人生への疑念が浮かび上がり少しずつ本を読むようになっていった。村上春樹はなんといっても特別で彼の小説を読みだすとすぐにその小説の深い精神世界に誘われていく。結婚してから読んだ本でミヒャエル・エンデの「果てしない物語」は読んでいる間ずっとその冒険物語にはまりこんで読んでいた。ベッドに寝ころびながら僕自身がその冒険に剣を携えて入り込んでいった。空想の世界で遊ぶってほんとうに楽しいことなんだと教えてくれた一冊になった。長田弘の詩もよく読んできたがクリムトの画とコラボした「詩ふたつ」は実に表装も詩のそばに置かれた絵画も美しく、贈り物にするならこの本と思っている。

10 月 19 日

Line75 メールが久しぶりに賑わいを見せ夫婦で麻雀をやりにいったというメールもあった。亡くなってしまった Ko 君や行方知れずの H くんらは授業が終わるとすぐ麻雀していたなあということを出し感懐深いものがある。

今日は午前中発達障害児が通う療育施設 A 園に行って 3 人の自閉スペクトラム症の男児の言語相談に当たってきた。一人目の B 君は言語の表出面で事物名称は上手に言えるようになってきて、好きな電車名はいっぱい言えるが動作語がなかなか言えるようになってこない。たとえば、洗うや投げるといった動作語はその動作をやっているときにしか使われない言葉なので、また事物名称の様に目に見えるものについての言葉ではないので発達障害児には獲得がなかなか進まない場合が多い。

二人目の男児は発達がかなり進み見たて遊びもよくやるようになってきていたので、彼が油揚げが好きだという母の話があったので積み木を油揚げに見立てておままごとごっこを楽しんでみた。三人目の男児は話が止まらずずっと話し続けて他者の話が聞けないということが課題に上っていたので、一分間ほど沈黙する練習を試してみた。学校の授業では東田直樹くんが中学生の時に書いた「僕が跳びはねる理由」を読みあっているが、“ああ”そういう理由があってその行動をしているのかということがわかってこちらからの一方的解釈が誤っていたことに気づかされる。

10月22日

僕は三重県津市で生まれている。昨日は祖母の33回忌で相模原に住む弟夫婦とともに津市にあるお寺で法要を営んできた。祖父母も父母も亡くなり何回も通ったお寺とお墓である。私や弟はこのお墓に入ることになろうが次の世代にはどうなるかわからない。お墓をどうするかはほんとうに現代的問題である。名古屋まで3時間の特急の車内では森田真生の書いた「数学する人生」を読んだ。ここでは数学者の岡潔についても語られている魅力的な本だったが、二十歳の頃「春風夏雨」という岡潔の書いた本を読み、“人間のこころの中心には情緒がある”という論にひどく魅せられてきた。

津ではひどく柔らかな腰のないのが特徴の伊勢うどんを初めて食べ、名古屋では50分並んでひつまぶしを食べて帰ってきた。時はどんどん過ぎていく。

一紹介した本たち一

吉野弘著：吉野弘詩集、岩波文庫
 向田邦子：眠る盃、講談社文庫
 小川洋子著：人質の朗読会、中公文庫
 星野道夫著：旅をする木、文春文庫
 モンテーニュ著：エッセー、岩波文庫
 藤原新也著：メモントモリ、情報センター出版局

須賀敦子著：コルシア書店の仲間たち、文藝春秋
 松山巖著：須賀敦子の方へ、新潮文庫
 大竹昭子著：須賀敦子の旅路、文春文庫
 宮本輝著：錦繡、新潮文庫
 福岡伸一著：動的平衡、小学館新書
 鴨長明著：方丈記、高橋源一郎訳、河出書房新社
 村上春樹著：一人称単数、文春文庫
 上大岡トメ著：キッパリ！たった1分で自分を変える方法、幻冬舎文庫
 須賀敦子著：イタリアの詩人たち、青土社
 吉田兼好著：徒然草、内田樹訳、河出書房新社
 沢木耕太郎著：流星ひとつ、新潮文庫
 伊藤ひろみ著：いつか死ぬ、それまで生きる
 わたしのお経、朝日新聞出版
 ボルヘス著：伝奇集、岩波文庫
 池田晶子著：14歳からの哲学、紀伊國屋書店
 柴田ケイコ著：パンドロぼう、KADOKAWA
 澤田直訳：ペソア詩集、思潮社
 アントニオ・タブッキ著：インド夜想曲、白水社
 小川洋子・河合隼男著：生きるとは自分の物語をつくること、新潮文庫
 川上弘美訳：伊勢物語、河出文庫
 中島京子訳：堤中納言物語、河出文庫
 川端康成著：掌の小説、新潮文庫
 池田万寿夫著：エーゲ海に捧ぐ、中公文庫
 澁澤龍彦著：東西不思議物語、河出文庫
 澁澤龍彦著：幻想の肖像、河出文庫、
 澁澤龍彦著：唐草物語、河出書房新社
 アレクサンドル・デュマ著：鉄仮面、講談社文庫
 太宰治著：人間失格、新潮文庫
 ミヒャエル・エンデ著：果てしない物語、
 岩波少年少女文庫
 長田弘著：詩ふたつ、クレヨンハウス
 東田直樹著：僕が跳び跳ねる理由、エスコアール
 森田真生著：数学する人生、新潮文庫
 岡潔著：春風夏雨、角川ソフィア文庫